

# 創学舎ニユース

No.230

## 親子の関係(五五)

経済の話の続きであるが、その前に私の立場をはつきりさせておきたい。社会を批判するよ  
うなことを書いて、「偏った思想の持ち主」とい  
われるのも心配だからである。私は、これまで  
特定の宗教団体に参加したこともないし、学生  
運動の経験もない。「日本史」を教えていること  
もあって、個人的に好印象を持っている「天皇」  
もいるが、右翼ではない。社会主義者でもない  
し、左翼でもない。前にも書いたが、ずっと生  
活保護をつけて育ったので、それを可能とした  
この社会に大いなる感謝の気持ちを抱いている。  
知人には、右から左までいるが、政治的には是々  
非々で全面的に賛同することはない。水俣病、  
狭山裁判、HIV訴訟など、数多くの問題に関  
心はあるが、署名や募金中心で、のめり込むこ  
とはしない。阪神・淡路大震災のときは、かけ  
つけたが、一泊二日で帰ってくるへっばこボラ  
ンティア。いわゆる小市民である。

私は、ただ「本当のこと」を知りたい。「望ま  
しい生き方」を知りたい。「望ましい社会の在り  
方」を知りたい。そして、それを求めて努力し  
たいと思っているだけである。そして、親や友

人や恩師や血縁、その他世話になった人にお返  
しはしたいし、この社会にも貢献したいと思っ  
ているにすぎない。

新聞・雑誌はよく読む。メジャーなものでも、  
スト、代、潮、春、ユーズウィーク、  
刊金曜日、界、藝春秋、日新聞、売  
新聞…。時には、与党や野党の機関紙も。

さて、「こいつの立場での発言であることを理  
解していただいたうえで、このあとの駄文にも  
おつき合いを願いたい。

前号でも触れたが、朝鮮特需からいざなぎ景  
気まで、その多くは国際紛争のおかげであって、  
いづなれば、国民が頑張っている所に宝くじが  
何度も当たったようなものである。その間、財  
政も家計も膨らむだけ膨らんだ。企業はその膨  
らんだ財政や家計のおかげで、これまた肥大し  
豊かになっていった。そして、一九七三年。宝  
くじに当たることはなくなった。石油ショック  
と伴に高度経済成長は終わるのである。結果、  
一九七四年より赤字国債の発行がその額を増や  
しながら現在まで続く。まさに「宝くじ」の不  
足分を補ったためであった。膨らんだ企業をつぶ  
さないために、また、作りに作った公園など諸  
団体を維持するために国債発行は続けられた。  
そのおかげで、「宝くじ」当選者のようなお金の  
使い方は維持された。それが現在に至るこの三  
十年である。政府の借金は一体いくらになるの

だろう。ほんの一部を除くほとんどの自治体も  
公債を発行しているが、その額はいくらになる  
のか。また、財政投融资の形で貸し出されたお  
金は、本当に返ってくるのか。近年、日本はア  
メリカの国債を大量に買い支えているが、それ  
はどつなるのか？週刊 春などによくある程度  
の話だが、大変な問題である。

(小林)

## 教育「名言」紹介(5)

どんな子供もいくらかは天才であり、どんな  
天才もいくらかは子供である。

出典 アルトゥル・ショーペンハウアー(ド  
イツ、一七八八—一八六〇)『意志と表象として  
の世界』

解説 子どもと天才を結びつけるものがある  
とすれば、それは、想像力にあふれた創造性で  
ある。子どもはよく、大人が思いもよらない  
想像をして、大人の硬直した思考に風穴を開け  
る。天才もまた、一般人が思い描きもしない世  
界の見方を提示したり、新しい世界を創造して  
みせる。ゴッホによって描かれた、あの炎のよ  
うなつねる糸杉を見ると、私たちは驚きとこ  
もに、新しい世界の見方を学ぶことができる。

「子どもは小さな哲学者だ」といわれるのも、  
子どもの世界の見方が大人にとって新鮮だから  
である。

子どもと天才がもつ想像力と創造性は、先人見  
をもたないということと、現在の行為に没入す  
る集中力の高さに支えられている。日常生活で  
私たちは、様々なりんごをいくりにして、一  
つひとつのりんごの新鮮な出会いを省略する  
ことが多い。セザンヌが描くりんごの存在感は、  
私達が普段りんごというものと新鮮に出会って  
いないことを教えてくれる。子どもは、先人見  
が少なく、人や物と新鮮な出会い方をする。そ  
して、「王様、裸だ」と言った子どものように、  
その思いを権威と関わりなく率直に表現する。  
天才もまた、権威に盲従しないで自らの信じる  
ところを表現し、それを新しい作品として提示  
する。セザンヌは、一つひとつのりんごに非常  
な集中力で没入し、自分の表現力を研ぎつつ、  
新しい出会い方を模索し続ける。子どもも、対  
象の細かな部分にまでこころを入り込ませてい  
く集中力をもっている。版画家の棟方志功(む  
なかつしこう)は、子どものように驚きを感じ  
ることに於いて天才であった。からだの共感  
能力に支えられて、世界に対して新鮮な驚きを  
感じる力(天才の場合は感じ続ける力)が、子  
どもと天才を結びつける。

子どもの力として真に驚くべきはその学習能

力の高さである。子どもの言語習得力は、驚異

的である。知らない言葉を聞けば、それを一人で何回かつぶやいて身につけてしまい、次の会話に組み込ませて練習していく。学習方法を教えられなくとも、最良の学習方法を見つけ実践する姿は、まさに天才の学習能力の高さに通じるものである。天才は、生まれつきの白紙の状態では、天才の学習から生まれる。ゲーテは、ロマンティズムの言つ独創性に反対して古典伝統に学ぶ必要性を強調した。モーツァルトも、「訓練と模倣とを教養の根幹とする音楽家」(小林秀雄)である。子どもを天才視すること、子どもに文化を学習させる機会を逸すことがある。だれかを天才と呼んだり、子どもを天才と見たりすることは、自分への閉塞へいそぐした世界にうんざりしている大人たちにとって一服の清涼剤になるが、相手を甘やかしてスポイルする危険性を含んでいる。

(アガトス教育研究所)

## 阪神・淡路大震災から十年

一九九五年一月一七日兵庫県南部を震度7の地震が襲った。それから二ヶ月後の三月下旬、私は大学生協の募集したボランティアに参加し

て神戸を訪れた。

配属された須磨区の板宿小学校は、新しい建物だったので倒壊を免れていた。校舎の中では、教室だけでなく、廊下にまで人が生活の場を形成していた。一教室に二十名ほどの人達が暮らす。ついたてもなくプライベートのない生活を二ヶ月も余儀なくされている現状に驚く。校庭には公衆電話や簡易のシャワーボックスが設置されていたが、食事は非常に厳しいものであった。朝は菓子パンが二つと牛乳が配給される。昼はない。夕方になると仕出しの弁当が届くが、冬の寒さに冷えきっているため、ボランティア隊がお茶と汁物を炊き出す。毎日がその繰り返しである(私は活動が終わって温かい食事をした途端腹をこわしてしまった)。

ボランティアといっても、瓦礫の撤去などという大仕事はすでになく、朝は掃除をして、食事を配り、昼は郵便物の配布や子供の遊びの手などをし、夜は炊き出しをする。寝るのはテントの中や小学校の廊下であった。当時、ボランティアの一番大きな仕事は各地から送られた救援物資の整理であった。校庭のテントの中には、大量の古着や、おむつ等の衛生用品や、日用雑貨、缶詰、インスタント食品の類いが山のように積み重なっていた。食料はまだいいのだが、被災者だからといって古着を好む人はいないし、数がそろっていないために平等に配れないもの

ばかりがプールされていた。私は、メディアの向こう側にいる人々と現場との乖離を強く感じた。手を差し伸べることは必要でも、被災者の視点を欠いた善意は、単なる押し付けと自己満足のレベルにとどまっていた。しかし、自分だつてここに来るまでそんな想像力などなかったのだ(その逆も経験した。神戸滞在中に東京では地下鉄サリン事件が起きた。しかし、現実感とは薄く、まるで他の国の出来事であった)。

しかし、最も驚かされたのは、同じ神戸市でありながら、地区によって生活に天と地ほどの差があったということである。国家間の経済的な格差の問題を南北問題というが、神戸市にも同じような状況が出現していた。学生ボランティアの集合場所であった私大は西区という場所にあった。瓦礫の中の神戸市街からは地下鉄でわずか十数分のところである。ところが、この西区は山手につくられた新しい地区であるために、地震の被害がほとんどなく、ガスも水道も使え、人々は普通の日常を過ごしているのである。同じ市内であるのに、だ。地下鉄でわずか十数分の距離を隔てて、生活は先に述べた苛烈な避難所の生活へと変わる。しかも、全国から人々が集まり救援活動をしている最中に、私大の学生は野球の練習さえしていた!「この落差は一体何なんだ」私は地獄と天国を行ったり来たりしているような感覚を何度も覚えた。そし

て、市民感情の中にも嫉妬や憤怒の思いを垣間見たのである。

神戸で多くの人々と出会ったことは財産であった。神戸には全国から色々な人達がやってきていた。東京から仕事を休職してきていた男性、震災発生直後に鳥取から自転車で(一)きた少年、そして私と同じような学生達、勿論神戸の人々も積極的に動いていた。実際、板宿小学校のボランティア隊を統率していたのは、二十歳くらいの地元の青年だった。正直言つて相当ヤンチャをしてきた風格である。だが、そのリーダーシップと存在感は尊敬すべきものだった。そこには、神戸に対する深い愛着が感じられた。もしも、私が災害に遭つたとして、彼等のように土地を離れずに頑張れるだろうか。いまだに、答えを出せずにいる問いである。

あれから十年になる。塾の生徒達にはほとんど記憶にない出来事となつてしまった。だが、もしもの時、記憶を持つ私達大人が、子供達を守らねば、と改めて思つた。

(関)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、ご希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。